

水野祐 ① 20P

魏志倭人伝 45P 1/2行  
この反7P

魏志倭人伝  
初月 58.6.1  
21.2.31

1,708 P 1/2

からだ 162cm  
小林P  
身体 944

魏志倭人伝 45P 1行

162cm 小林P  
寿考 256P 長い  
(考は老の象)

な お、水野祐氏は、  
と記されていゝ。  
を用うるが如きなりし。  
朱丹を以て其の身體に塗る。中国の粉。  
魏志倭人伝には、  
とすのとな全く同じような光景であつた。  
ニオシロイを顔に塗つて、美しく見せよう  
それは丁度、中国の女達が、粉（紅藍）を  
へてを忘れていゝるふうであつた。  
化粧にひたり切り、他のす  
くになる為、心を込めて化粧に打ち込んだ。  
の身體に塗り、首飾りなどを着けて盛装した。  
倭国の貴人は、男も女も、朱丹を以て其の  
が常であつた。ことに女達は、美  
かなる為、心を込めて化粧に打ち込んだ。  
の身體に塗り、首飾りなどを着けて盛装した。  
倭国の貴人は、男も女も、朱丹を以て其の  
が常であつた。ことに女達は、美

寿考（ながいき）

朱丹 吳漢 1130  
朱丹 吳漢 1130  
朱丹 吳漢 1130

「植輪」 小林97 丁史読本106P  
 令和2(2020)9.29(火)~10.1(4回)  
 はにほの虫上  
 几士記 472

1,708P-2/2

元志は 未に見5市  
 大コク 1416  
 えん 馬支 草の名 紅色をとり  
 え 1847 大コク 1698

1/TF 9/30  
 9/30

\*

また、日丹後国風土紀逸文に浦嶋子条には  
 「紅の顔」とある。  
 さくらに又よく知られてい  
 る。赤く彩色した男女の人物植輪が多数出土し  
 ている。

また、日丹後国風土紀逸文に浦嶋子条には  
 「紅の顔」とある。  
 さくらに又よく知られてい  
 る。赤く彩色した男女の人物植輪が多数出土し  
 ている。

また、日丹後国風土紀逸文に浦嶋子条には  
 「紅の顔」とある。  
 さくらに又よく知られてい  
 る。赤く彩色した男女の人物植輪が多数出土し  
 ている。

口粉を

今の甘肅・陝西地方

こと

かん  
顔<sup>369</sup>げせ  
元 369<sup>p</sup>

1,709<sup>p</sup> - 1/2

ためつまためつ 元 1400<sup>p</sup>

女<sup>か</sup>達<sup>か</sup>は、鏡<sup>か</sup>の前<sup>か</sup>にぺったりと坐<sup>ま</sup>り込<sup>こ</sup>んで、  
鏡<sup>か</sup>の向<sup>む</sup>うの我<sup>わ</sup>が顔<sup>か</sup>ばせに、ためつまためつ見<sup>み</sup>  
入<sup>い</sup>り、さらに少<sup>す</sup>しばかり手<sup>て</sup>を加<sup>く</sup>えては、  
としげしげと打<sup>う</sup>ち眺<sup>な</sup>め、――そいて、にっ  
こり微<sup>ほ</sup>笑<sup>ほ</sup>んでみたりするのだった。  
その<sup>な</sup>の<sup>な</sup>うな女<sup>め</sup>達<sup>だ</sup>の様<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>は、洛<sup>らく</sup>陽<sup>よう</sup>の女<sup>め</sup>達<sup>だ</sup>のあ  
の真<sup>ま</sup>剣<sup>けん</sup>な眼<sup>まな</sup>差<sup>さ</sup>しや仕<sup>し</sup>草<sup>くさ</sup>と、どうみても  
変<sup>か</sup>わるところはなかつた。  
そんな女<sup>め</sup>達<sup>だ</sup>を見<sup>み</sup>るのは、梯<sup>てい</sup>儼<sup>えん</sup>にとつて、心<sup>こころ</sup>  
楽<sup>たの</sup>しいことであつた。

「ところであかめ、おまえのお父上は、今  
年お幾つになられるのだね」  
梯儂は、柳目のとおった長い黒髪をそつと  
手ですくい取ると、鏡の中の赤女に向つて尋  
ねた。「円い鏡面」  
赤女は鏡の奥の美しい自分の姿をうっとり  
と見詰めて、いゝをが、「ほつ」と溜め息をつき  
「さら」に「一層」心を込めてほんの少し朱丹を  
塗り足しながら、云った。  
「父はもう百十二歳になり  
ますわ」  
梯儂は、思ひかけないその答に驚き下  
女のその目をみつめた。  
「あかめ、赤女は、冗談を言っているのだらう」  
と思つたのだった。  
「しかし赤女は、なおも顔の手入れに余念が  
なく、まんざら鏡を言つてゐるやうに見え  
なかつた。」  
「戯言」  
「それ」に「一」も「かつ」て赤女を娶つたとな  
つたとき、投馬(設馬)薩摩(薩摩)国から急ぎやつ

1428<sup>P</sup>

て来たあの赤女の父・彌彌那利（耳成）は  
どう見ても四十代か、せいぜい五十代としか  
思えなかったのに、—— まったくおかし  
なことを言うものだ✓  
■梯偶は、目をしばたいて、赤女のあでや  
かな後姿をまじまじと見つめるばかりだった。  
へ本当に、そんな事が有り得るのだろうか  
何とも奇妙だ✓  
\*  
トル  
へそんな女とが有り得るのだろうか。何と  
も奇妙だ✓  
■梯偶は、これより以後、人に会うたび  
その歳を尋ねてみた。  
■すると、伊支馬・彌馬升・彌馬獲支・奴佳  
■韃を始めとする誰もが皆、口歳を尋ねられ  
たことを大いなる名誉と~~た~~と思いうらしく、胸  
を張り、眼を輝やかせて答えるのだった。  
へーかしく水にしても、倭人達はなんと壽  
考（ながいき）なのだろう✓



1710<sup>p</sup>-3/3

全<sup>く</sup> ①1709<sup>p</sup>-1/2 ②1668<sup>p</sup>-2/3  
前頁2行

梯<sup>てい</sup>僦<sup>けん</sup>は、女王<sup>じやうおう</sup>卑<sup>ひ</sup>彌<sup>み</sup>呼<sup>こ</sup>に拜<sup>はい</sup>假<sup>か</sup>した時<sup>とき</sup>のあ<sup>あ</sup>の衝<sup>しょう</sup>  
撃<sup>げき</sup>的<sup>てき</sup>な驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>を、改<sup>あらた</sup>め<sup>め</sup>て鮮<sup>せん</sup>明<sup>めい</sup>に思<sup>おも</sup>い出<sup>で</sup>てい

た。

六十<sup>ろくに</sup>歳<sup>さい</sup>以上<sup>いじやう</sup>とい<sup>い</sup>う高<sup>こう</sup>齡<sup>れい</sup>である<sup>である</sup>にも<sup>にも</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>ら

ず、あ<sup>あ</sup>のよう<sup>よう</sup>に照<sup>て</sup>り<sup>り</sup>とある<sup>ある</sup>ばかり<sup>ばかり</sup>に震<sup>ふる</sup>い<sup>い</sup>と

は、全<sup>また</sup>く、世<sup>よ</sup>にも不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>な島<sup>しま</sup>だ。ーーー<sup>ー</sup>やは

り、この島<sup>しま</sup>は不<sup>ふ</sup>老<sup>ろう</sup>不<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>神<sup>かみ</sup>仙<sup>せん</sup>の住<sup>す</sup>むと

こ<sup>こ</sup>うな<sup>な</sup>のであ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>✓

\*

288<sup>p</sup>

829<sup>P-2/2</sup>  
降下げる

1152<sup>P-2/2</sup>  
1711<sup>P-2/2</sup>

1,711<sup>P-1/2</sup>

紀上336<sup>T</sup>  
挿は挿の俗字 小鉢431<sup>P</sup> 地ち

63<sup>P</sup>

63<sup>P-2/2</sup>  
829<sup>P-2/2</sup>

もつとも「現代の我々にとって」到底信じ難いこの  
長寿の背後には「先に述べたような倭人社会独  
特の」考え方及び「慣習」があったのであ  
ろう。（荒筋の第一編「神代」において既述）  
つまり、恐らく倭人達は、  
①腹部の大きい「臨月の母」の姿をした高塚  
を平地や尾根などに築き、なきからきこの母  
の胎内に納めて、「その再来を」と願った。  
②そして、月満ちたとき、長鳴鳥（鶏）を鳴かせ  
腰に挿んだ石（羨道出口に挿んだ石）を取り  
除いて、二代目の出産（襲名）の儀式を行なった。  
③このようにして、一、二、三、次から次へ  
代も幾代も「先祖の名と年と地位とを受け継  
いでいった、  
のであろう」と推察される。  
たとえば、  
①ハツクニシラス天皇（崇神天皇）  
②武内宿禰（三白歳もの長寿者、第九章へ武  
内宿禰の項において既述）  
など「尋常ならざる長命を保ったとされてい  
る。（「記紀」）  
「記紀」に述べられてい  
る天皇（天石戸）

1.711<sup>P</sup> -  $\frac{2}{2}$

ちやく 云 143K  
 姉子 身 143K  
 よつき 1711P 1/2  
 夫つき 22行  
 考 22行

米

号水で  
は  
こ  
こ  
た、

天石穴の内へ隠れた後石戸を開いて生き返る

という慣わし<sup>なわ</sup>が<sup>263</sup>往古<sup>むかうこ</sup>の倭国<sup>わこく</sup>に<sup>132</sup>存在<sup>しんざい</sup>していた<sup>し</sup>のだらう<sup>う</sup>

――と思わせる万葉集の歌を見てみよう。

万葉集卷三一四一七、四一八、四一九の歌は

た、  
天<sup>あま</sup>の儀式<sup>ぎしき</sup>に  
盛<sup>も</sup>れに  
行<sup>い</sup>な  
れ  
て  
い

F ↓  
 下 ↓  
 上 ↑  
 へ  
 姫子か、  
 天竺石  
 から生まれ出て襲名し、名

と年と地位とを受け継いだ儀式

を念頭において解釈すべきであろうと想到

★水了。

次  
の  
よ  
う  
に  
記  
さ  
れ  
て  
い  
る  
○  
(一) 萬葉集  
(一) 日

本古典文学大系  
岩波書店  
二〇一〇  
二〇一頁参照

河内王を豊前國鏡山に葬る時手

持女王もちの女王の作しる歌うた三首

(417) 王の親魄逢へや豊國の鏡山を宮とさだむ

〔大意〕河内王のなれ睦んだ魂と再び逢え  
ないというのに、姿を見ろという名の豊国の  
鏡山を永く宮と定めておいでだ。＊親魂は睦  
まじい魂逢へやのや反語で逢えはしないのに意  
(418) 豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待て  
ど来まさず  
〔大意〕豊国の鏡山のお墓の入口に岩の戸  
を立てて、お隠りになっておられるらしいで  
お待ちしても、出ておいでにならない。  
下げ  
(419) 石戸破る手力もか手弱き女に―あれは  
術の知らなく  
〔大意〕お墓の岩の戸を破る手の力が欲し  
い。手の力の弱い女である私には、どうして  
よいか、術が分かりません。  
■ なお、次のように解説されていゝ。閏八月二十七日に  
① 河内王という王は何人もいゝが、持統三年大  
宰帥となつた王のことであらう。日本書紀の同ハ  
年へ六九四四月五日条に筑紫大宰率河内王に  
淨大肆を贈り、賄物を賜わつた。とが見える。

ただ 1713<sup>1</sup> - 1/2

1.712<sup>2</sup> - 2/3

万の200注2 5199<sup>3</sup> 万D-167<sup>4</sup> 神村村30<sup>5</sup> 凡そ511<sup>6</sup>

1253<sup>7</sup>

1634<sup>8</sup>

から、その少し前に現職で現地に没したうし  
書店、二〇〇頁、注一参照。  
② また、豊前国風土記逸文、鏡山条には、  
「田河の郡の鏡山は、郡の東にある。昔者、  
氣長足姫尊が、此の山で勅祈ひされた。」  
と、たゞと記されておる。  
福岡県田川郡香春町鏡山（鏡山神社のある岡）  
が、遺跡地という。「風土記」日本古典文学大系  
岩波書店、五一頁、注一四。「萬葉集」(一)日本古典  
文学大系、岩波書店、二〇〇頁、注二参照。  
河内王を慕って作った手持女王の三首の歌  
をあわせて、次のように解いてみた。  
永久の宮とお定めになったので、うか。入  
口に石戸を立てたまま、いくらお待ちして  
も出ておいでにならない。  
ただお待ちして、より、私自身が石戸と  
を破って中へはいり、河内王にお逢いして、  
是非ともこの世へお連れ戻したいのだけ。  
と、  
手のかの弱い女である私には

云<sup>9</sup> 711

云<sup>10</sup> 714

云<sup>11</sup> 2042

1,712<sup>17</sup> - <sup>3</sup>/<sub>3</sub>

こと

どうしてよいか分かりません。お墓の石戸を破る  
手の力が欲しい。石戸を破る力さえあれば  
河内王のなれ睦んだ魂と再び逢うことが出来る  
でしょうに  
手持女王の悲みの歌は、この当時の人々の  
胸を打ち、万葉集に載せられるところとな  
ったのであろう。

\*

■ いうまでもなく

へ三代も四代も、歳を積み重ねるように加  
えていつたら、必然的に八・九十歳、あるい  
は百歳以上にもなる

わけである。

■ ー かしなから、中国の帯方郡から来朝した

梯儼には

暫く元1007<sup>P</sup>  
ル1の内

元P  
150

わけの合がな  
次頁 16行

1,713<sup>P</sup>-1/2

かたゆら小林92<sup>P</sup>  
側

「ただ」④1712-2/3  
HV

と称しております

「倭国に、そんな特殊な風習がある」  
などとは思ひ及ぶはすかなかった。  
誰も分り易く納得できるようには教えてくれない  
かった。  
「ただある時」側に仕える倭人達がある時次の  
ように言ったことはあった。しかしそれは、  
梯儼の理解の限界を越えた。全く掴まえてこ  
ろのない、奇妙な話であった。  
「私達倭人は、母の姿をした塚の胎内から  
生まれ、そしてこの身が絶えたとき、いまふた  
たび元の母の姿をしている高塚の胎内に戻って安  
らかに眠りにつくのです」  
「つまり、母の胎内から生まれた私達は、も  
う一度母の胎内に戻り、まどろむようにして  
時を過ごすのです」  
「そして、さらに倭人達は、こう言った。  
「しかし私達は、死というものを何よりも  
忌み嫌います。そこで、死んで高塚の内に入  
ることを、  
隠れる」  
と称しております」

改行

と云えるのです。また一方、親が母の姿をした場内に隠れた後、その身体を受け継いだ長子が十月十日の後の吉日にその場の胎内から出ることを、

生まれる。といひならわしております。

「そうですね。親の名と年と地位とは、この襲名の儀式によつて、その長子にそのまま引

き継がれるのです。」「こうして私達は、襲名の儀式を行うこと

はよつて、幾たびも幾たびも生まれ変わりつづけることか出来るし、もうも望むならば、万

代までも生きつづけられるか出来るのです。」「倭人達にとつてそれはあまりにも当り

前めことなのであうが、梯儀には、さっぱり要領を得ない。訳の分からない話で、かなかつた。

「梯儀が困惑しているのを見て、倭人達はますます熱っぽく説明した。

「すなわち、手短かにいうと、こういふのですよ。私達は、山の頂に母の寝姿

中腹などに

理解の1/2 1713-1/2 1714P

身籠る 2110P  
1711-1/2

開胎 336P (神功)  
なまから 1761P

の<sup>1359P</sup>高塚<sup>たかづか</sup>を造<sup>つく</sup>つて、その胎内<sup>たいうち</sup>に亡骸<sup>なきがら</sup>を隠<sup>かく</sup>し、そ  
して月<sup>つき</sup>が満ちて開胎<sup>ひらく</sup>となつたとき、今<sup>いま</sup>再びこ  
の世<sup>よ</sup>に生まれ出<sup>で</sup>る儀式<sup>ぎしき</sup>をとり行<sup>おこ</sup>なうのです。  
私<sup>わが</sup>達が、母<sup>はは</sup>の胎内<sup>たいうち</sup>に隠<sup>かく</sup>れてしまつた者の再<sup>また</sup>  
来<sup>き</sup>を願<sup>ねが</sup>ひ、  
コ生まれ出<sup>い</sup>でよ。母<sup>はは</sup>の胎内<sup>たいうち</sup>より生まれ出<sup>い</sup>でよ。  
石<sup>いし</sup>戸<sup>と</sup>よりこの世<sup>よ</sup>に生まれ出<sup>い</sup>でよ。母<sup>はは</sup>の胎内<sup>たいうち</sup>より生まれ出<sup>い</sup>でよ。  
と叫<sup>こゑ</sup>んで、長<sup>なが</sup>鳴<sup>な</sup>鶏<sup>とり</sup>を鳴<sup>な</sup>かせる。と  
母<sup>はは</sup>の胎内<sup>たいうち</sup>に身籠<sup>みごも</sup>り、身<sup>み</sup>をひそめて隠<sup>かく</sup>れ籠<sup>こも</sup>つて  
いた長子<sup>ちやうし</sup>が、産道<sup>さんどう</sup>の入口<sup>いりぐち</sup>の石<sup>いし</sup>戸<sup>と</sup>を通<sup>とお</sup>つて生まれ  
出<sup>で</sup>て、目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>たく。この世<sup>よ</sup>に再び生<sup>せい</sup>を受け  
るのです。  
倭人<sup>わじん</sup>達は懸命<sup>けんめい</sup>に説明<sup>せつめい</sup>するのだ。たが、  
しかし、梯<sup>てい</sup>儼<sup>げん</sup>は、いよいよ理解<sup>りかい</sup>に苦<sup>くる</sup>しみ  
真<sup>ま</sup>に申<sup>もう</sup>一<sup>いっ</sup>訳<sup>わけ</sup>なさうに、首<sup>くび</sup>を横<sup>よこ</sup>に振<sup>ふ</sup>つた。  
1160P 2183P 1965P

\*

大カク 1849  
呉漢  
家漢カ

小林317  
カニ7629

鏡文後 45

1,715

トギヒサ 賑賑(168)  
こつきゅう小林 哭泣 212

小林 とう 212  
おみ 212  
てい 91  
おみ 138  
おみ 45  
おみ 45

参集した人々は、  
「あの方は、賑賑やかなのが大好きで、  
と言いは、賑賑しく踊り狂い、酒を酌  
み交わして、別れを惜しんだ。  
ただ、肉を食わないことが、この者達の  
ならぬのだという。  
やがていよいよ決別の時となった。妻や  
子等が泣き叫ぶ中、無情にも棺の蓋は閉じら  
れた。そして悲しみの涙に見送られて、そ  
の棺は穴の中へおろされていった。櫛(棺)を  
入れ、外がわの箱は無かった。人々は土を  
封じて塚を作った。  
こうして已に葬ったとき、(家)の者皆

喪

ニ

他に 93<sup>p</sup> 95<sup>p</sup> 4行 梁書  
晋書、梁書にも記載 1.716<sup>p</sup>

魏志倭人 57<sup>p</sup> 45<sup>p</sup> 同 1722-3/4  
1852<sup>p</sup> 1710-7/2  
1705<sup>p</sup> 1/2  
魏志倭人 45<sup>p</sup>  
2200<sup>p</sup>  
4林 900<sup>p</sup>

が 水中に詣り、澡浴するのだった。それは  
中国の練沐に似ていた。練沐とは、一周忌の  
喪服である練を着て、水に沐することである。  
なお、中国の文献に  
①「其の死には棺有るも槨無く、土を封じて  
冢を作る。始め死するや停喪十餘日、時に當  
りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌  
舞飲酒す。已に葬れば、與家水中に詣りて澡  
浴し、以つて練沐の如くす」  
傳  
②「其の死には停喪すること十餘日、家人哭  
泣し、酒食を進めず。而して等類就いて歌舞  
し、樂を爲す」  
後漢書倭伝  
③「死有棺無槨、封土爲冢、初喪哭泣不食肉  
已葬、舉家入水澡浴自絜、以除不祥」  
晋書  
④「其死有棺無槨、封土作冢」  
梁書  
などとある

大27 1388  
小林 596<sup>p</sup>  
212<sup>p</sup>  
水浴

小27 307  
家談  
小林 212

現支 45<sup>p</sup>

類  
而(て

左氏<sup>ノ</sup>尸

1,718<sup>P</sup>

次頁  
から

ところでは参考迄に述べると、  
春秋左氏伝に隠公の元年七月条には、停  
喪の長さについて、次のように記されている。  
「<sup>ハ</sup>礼によれば」天子は崩じて七ヶ月で葬  
る。その際、車の両輪の間隔を同じくする全  
ての国の諸侯が集まる。諸侯は死後五ヶ月で  
葬り、同盟の諸侯が集まる。大夫は三ヶ月で  
同格の位のもものが集まる。士は翌月に葬り、  
親族と外戚（妻の一族）が集まることになっ  
てゐる。云々」  
とある。

前頁

分

後年の後人達の懐かしに  
つての記載なのであるが

更に、隋書倭国伝には、  
貴人は三年外に殯し、庶人は日をトして

とある。

座む。云々

356 4/11  
5/175-5

● 倭国の支配層は、停喪の期間が長いことを  
名譽だと考えて、―――いつか、三年もの

長期にわたって殲を行なうようになったの

かき知れたい

余 ✓ 条には、先に述べたとおり、

その期間が長いことを栄と爲す。死者に對す

る祭礼には、生（なま）まものと、調理（ちようり）したものの刃（や）

の項において既に

長期（ちやう）の（ひ）  
 間（ま）の（ひ）  
 の（ひ）  
 停（と）  
 喪（さう）  
 を（を）  
 行（い）  
 な（な）  
 た（た）  
 の（の）  
 伝（でん）  
 う（う）  
 か（か）  
 た（た）  
 か（か）  
 っ（っ）  
 て（て）  
 水（みづ）

とも、般の王族の血筋を引く箕子達の強い影  
響を受けて、長期にわたる殯を行なうたのであ  
ろうか。そうした詳細については分からない。

\*

ともあれ、魏志倭人伝に、

「停喪十餘日」

とあるところからみると、梯儻が倭国に滞在

してゐる時に亡くなったのは、身分の高い者

ではなくて、（肩代の）口士に相当、あるいは別種

族（扶余系般民等）であつたらうと想像される。

また、

「其の死には棺有るも槨（そと）は（こ）無く

土を封じて冢（塚）を作る」

という描写から推察すると、この墓は、横穴

式で、（土）ないように思われる。

地面に穴を掘り、穴の中に棺を入れ、土を

かぶせ、（土）見ている前で、かなり小さなもの

塚を作つたような印象を受ける。

尚、あるいは梯儻は、下益城郡城南町宮地

あたり、この当時存在してゐた墓地を訪ねた

めかも知れない。

(\*)

1720-2  
1585

とみよう。(第14回へ肥後国主要部の地図参照)  
この地方の古墳群の中心は二つあり、  
①一つは、吉野山(圖ハハ心)およびその周  
辺の古墳群、  
②一つは、宮地の東南二・五キロの塚原古墳群  
である。  
塚原古墳群の地には、前方後円墳二基、円墳  
五基(内一つは装飾古墳)が存在しており、  
知られていた。  
それらの古墳のあいだを九州縦貫高速道が  
通ることになり、発掘調査が行なわれた。  
その調査範囲である幅六〇メートル、全長四五〇  
メートルのなか、  
四〇基、石棺一八基、石蓋土壇一基、計九八  
基が発見された。その後一〇三基となった。  
そして、周辺地域の試掘を九五カ所で行な  
った結果、その全域は二〇ヘクタールに及ぶと  
考えらるに至っている。  
この方形周溝墓は、日本最大の群で、もっ  
と大きなものは一辺二七メートル、道路線内でも

1721 P-1/2

・頁の上半分に  
限度一杯大抵  
載せる。



中心部わけ 13QG-J4 - 塚原の方形周溝墓群

[A矢印]



中心部わけ 13QG-J4 - 塚原の円墳群

中心部わけ 15QG-J4 写真図版256 塚原古墳群 (円形周溝墓群なのかも知れない)

[B矢印]

13QG-J4 「くまもとのあゆみ」緑川編、熊本県教育委員会、平成16年3月15日発行、30頁参照。 413

次頁

大 三 月 廿 二 日

ひやうわつ  
描出 元1896<sup>p</sup>

いぎやまのやま  
伊耶那岐命  
お礼 46<sup>p</sup> (38<sup>p</sup> 29<sup>p</sup>)

1,722<sup>p</sup> - 1/3

魏志倭人伝 45<sup>p</sup>

⑦ 732<sup>p</sup>

次頁 13~149<sup>12</sup> 13

① 1715-2/2

① 1715-2/2

HV

12.5<sup>5</sup> 12.04

二〇以上四基、最小のもので一〇七八心  
である。

この地域全域では、おそらく一〇の基以上  
円墳も含めると五百し六百基の古墳が存在す  
るものと更われる

という。新・熊本歴史(2)熊本日日新  
聞社、一、二、三頁参照

(1) なるまじい 魏志倭人伝の記載されて  
「一、一、己に葬れば、舉家水中に詣りて禱浴

し、以て練沐の如くす」というのは、伊耶那岐命の禊を思わせる。  
と、いかしたら、梯儼が倭国に留まっていた  
時に亡くなったのは、倭人だったのたろう  
か。

(2) 停喪の期間が、四十餘日と極めて短い。  
棺を土中に直接埋めた印象を受ける、  
ことなどからいつて、

棺有るも櫛(そとはこ)無くしと

吉里首 井光  
いわおいわくくずら - 3/2

文形周溝墓  
新(1) - 313 P  
(1) - 316 P

1.722 - 2/3

④490 新 当時の群生人の  
④17191 子孫達の墓か?  
とせられた。

新・熊本の歴史(2) 113 P 下中央  
114 P

西流している緑川の南岸、宮地の東南約二  
時には、可塚原古墳群にあって、前方後円  
墳・円墳・方形周溝墓群・周溝のない石棺群  
石蓋土版など、各種多数が発見されており、  
ことに方形周溝墓群は日本最大規模のもので  
ある。

■近畿・中国・新友は玄海灘沿岸の編年から  
塚原古墳年代を四世紀末～五世紀とみる見  
解があった。しかしC14測定の結果は西暦二五五  
年と出た。

・そこで

「三世紀に塚原古墳群は形成されたのであ  
ろう」  
写真図版第④塚原古墳群

といわれている。新・熊本の歴史(2)熊本日日新  
聞社、一一一～一一四頁参照(方形周溝墓)  
■とはいえ、梯偶がどのような形態の墓を見  
たのかは、詳らかでない。

\*

H30(2018)4.2(土)~4.23(4回), H31(2019)1.6(日)~1.7(3日), 令和元(2019)6.9(日)~6.10(3日) 令和2(2020)1.15(日)~1.16(4日), 令和2(2020)9.30(日)~10.1(4日)  
H3.12.3(土)  
H10.6.8(日)  
新・熊本の歴史(2)-112<sup>P</sup>  
1,722<sup>P-3/3</sup>  
147~188 2枚  
半ば  
記(星)114<sup>P</sup>  
紀元198<sup>P</sup> ④1769<sup>P-4/4</sup> ④732<sup>P-3/2</sup>

1/10  
1/30  
④732<sup>P-3/3</sup>

タケル  
④725<sup>P</sup>

④1683<sup>P</sup>

の台頭✓の項において既述  
おろらく、ハツグニスラス天皇の軍の一翼  
を担うことになった井光や、磐排別の子の後  
裔達は、二世紀半ば頃の箕子達との戦闘  
日倭国大乱に於いて、大きな戦果をあげた  
のであろう。  
その中で、後年、  
井光(吉野首部の始祖)  
磐排別の子(吉野の國標部の始祖)  
は共に、日国神(土着の神)と尊称され、  
敬われることになったように思われる。(神  
武紀・神武記参照)  
熊本平野南端部を西流する緑川の中流域  
南岸に見られる巨大な方形周溝墓群は、  
吉野首部、あるいは吉野の國標部一族の墓  
だっただろう。  
と考えてみた。  
\*吉野首部も吉野の國標部  
も、扶余系殷民の子孫だったのではなかろうか。  
(第七章へ倭奴国の台頭✓参照)